

# デカルト形而上学における「思惟」概念について

吉田 健太郎

社会科教育講座（哲学）

## Concept of Thought in Descartes's Metaphysics

Kentaro YOSHIDA

Department of Social Studies (Philosophy), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

### 1. 問題の所在

デカルトは「私は在る、私は存在する Ego sum, ego existo」(Ⅶ, 25) ことを、方法的懐疑のただなかで精神が把握する「必然的に真」なるものとして確認する。しかし、「いまや必然的に存在するこの私が何であるか」(Ⅶ, 25)については、まだ十分に理解されていないという。「私」については、それが「何であるか」は宙づりにされたまま、「私」の实在が確認されるという順序になっている。少なくとも『省察』に従う限りそうになっている。「私」が「何であるか」の規定は、「私」の实在が確認されたのち、「今まで私を何とと思っていた」のかを反省する形で開始される。いくつかの選択肢がそこで検討され、ことごとく否定される。「私」を「人間」によって規定することは退けられる。「理性的動物」「身体」によって規定することも退けられる。では「思惟すること cogitare はどうか」。「ここに私は発見する。思惟 cogitatio がそれであると。これのみは私から切り離されることはできない」(Ⅶ, 27)。「私」を「思惟するもの res cogitans」以外の仕方で規定することはできない。では「思惟するもの」とは具体的に言えば何なのか。テキストでは、二通りの仕方で規定されているのをわれわれは見る。第一の規定。「言いかえれば、精神 mens, すなわち魂 animus, すなわち知性 intellectus, すなわち理性 ratio である。これらの言葉の意味は、以前には私には知られていなかった」(Ⅶ, 27)。第二の規定はこうである。「すなわち、疑い、理解し、肯定し、否定し、欲し、欲さず、また想像し、感覚するものである」(Ⅶ, 28)と。第一の規定と第二の規定は両立するのだろうか、という疑念が即座に生じてくる。第一の規定からは合理主義者デカルトという描像が浮かんでくる。その場合、デカルト的思惟の本質は「理性」にあるのだということになる。一方、第二の規定はそう単純ではない。理性は他の多くの様態と同格・並列に位置づけられている。デカルト的思惟は「理性」へ一元的に還元されるような単純なもの

ではない、という予感がしてくる。

この疑問について考察するときの前提は、デカルトが「私」を「理性的なるもの」とは定義せずに「思惟するもの」と定義したことである。あくまで「思惟」が前面に出ているのだ。精神の主要属性は「思惟」である。理性は「思惟」の「様態 modus」でしかない。第一の規定にしても、「精神」や「理性」といった言葉は、「以前には私には知られていなかった」新しい概念規定を含んでいるのかもしれない。デカルト的「思惟」の用法が、改めて問われなければならない。とりわけ、「意識 conscientia」概念との関係について再考してみる必要があると思われる。

### 2. デカルト的「思惟」の在り方

#### (1) 第二答弁「諸根拠」による「思惟」の定義

「思惟 cogitatio という語には、われわれがそれを直接に意識している conscius という仕方で、われわれのうちにあるすべてのものが含まれる。かくして、意志、知性、想像力、感覚のすべての働きは思惟である。」(Ⅶ, 160)

そもそも、これは果たして思惟の定義になっているのだろうか。後半は意志・知性・想像力・感覚といった諸様態が枚挙される形で思惟概念の外延が示されている。では、思惟概念の本質・内包的規定は何といえよのだろうか。

とりあえずは、「直接的に immediate 意識されている仕方で存在するもの」と定義することはできるだろう。思惟の諸様態が「思惟」という共通特性に包括されるための基本条件が「意識されてある」というわけだ。しかしここで、「意識している」を「思惟している」と同義に解することはできそうにない。思惟を定義するときの定義項に被定義項が使用されているとすれば、定義自体が循環しているということになってしまう。それでは「意識」をどのように捉えればよのだろうか。実のところ、「思惟」にしても「意識 conscientia」

にしても、改めてそれらを定義しようとすれば、かえって不明瞭になってしまいかねない。「最も単純で自明であるものを論理学の定義によって説明しようと努めた点で誤っている」(Ⅷ-1, 8)。『真理の探究』では「思惟」について、「それ自身によってでなければ知られない」(Ⅹ, 524)と言われており、それについての把握は「自らのうちに見出すところの、意識すなわち内的証言internus testimonium」(同)によるしかないとも言われていた。という次第であるから、われわれとしては真っ向勝負を避けて、まずは迂回路をとることにしよう。

## (2) 思惟の現象学的規定

現象学によると、思惟の根本特性として「志向性」「脱自性」が挙げられている。ここでは精神の働きを視覚に喩えるとして、何かを見ることを例にとって考えてみよう。例えば目で物を見るという場合、目が何かを見るというのは、視野に入ってくる外界の事物について見ることであって、原理的に目は「目それ自体」「自己自身」を見ることはできない。それは見る場合の盲点になっている。あるいは目という身体器官ではなく、見ることすなわち視覚作用を考えてみてもよい。何かを見ることにおいて基本的に盲点となるのは、自己自身を見ること、つまり「見ること」自身を映し出す(見る)ことである。視覚対象となるのは「見る」という行為や働きそのものではなく、その行為や働きによって映し出される外界の「対象」である。写真機は、自己自身以外の他のものを映し出す。つまりそこにある表出作用は、「脱自性」「超越性」「志向性」等と名付けられている現象である。こうした事例に、ウィトゲンシュタインが記している「書く」ことの例(『論理哲学論考』5.631)を付加してもよいかもしれない。世界中で生じている出来事をことごとく記録して書き尽くしたとしても、そこには、現に今「書いている行為そのもの」「書いている主体」は書かれることはない。

こうしたことは「見る」ことにとどまらず、想像すること、理解することにもあてはまる。要するに現象学によれば、思惟作用は、自己自身を対象とするのではなく、自己からいわば抜け出して、思惟そのものの以外の何かについて表示するという性格を根本特性として持っているというわけだ。

そうだとすれば、思惟が思惟自身について知覚することは不可能なのか。しかし『ビュルマンとの対話』では、「意識」とは自己自身の作用についてそれを表出することだと言われていた(V, 149)。では、自己自身についての思惟という意味での「意識」は、いかにして成立するのだろうか。ただしこの問いに対して、思惟作用を改めて主題化してそれについて理論的に探究する、という仕方では自己についての知識を獲得する

ことが可能だと答えるのは、ポイントを全く外している。第六答弁で言われていたように、「反省された、あるいは論証によって獲得された知識が要求されているというわけではない」(Ⅶ, 422)のだ。何かについて考えているまさにその同じ時に、その考えていること自体が、知覚されていなければならない。何かについて「考えていた」ことを思い出して、改めてそれを主題化したとすれば、それは現に作用しつつある現実態の「思惟そのもの」を知覚していることにはならない。

## (3) 思惟のハイブリッド的特性

『ビュルマンとの対話』では「意識するとは考えることであり、自己の思惟について反省すること」(V, 149)だと言われていた。ただし、精神は同時に「一つより多くのことを把握することができる」(V, 148)なのであって、自己の思惟について「意識する」とは、「何か」について思惟している時に、常に同時に「思惟していることそのこと」が知覚されていることなのである。ここで重要なことは、両者が同一の思惟作用において「同時に」知覚されているという点であり、「意識」とは、改めて思惟について主題化(対象化)して考察すること、とは全くの別物だという点である。さらに、「精神のうちには、それが思惟するものであるかぎり、精神の意識していないものは何もありえない」(Ⅶ, 246)ことから、思惟には意識が不可分に随伴するとデカルトは解しているようである。

その意味で思惟はハイブリッドな形態を示すのである。デカルトにとって思惟とは、同時に、自己自身の作用と、自己とは異なる何かを、同一の作用によって表示することだと定義できるかもしれない。ただし多少問題があるとすれば、かりに、「意識」も「思惟する」ことの一つだとすれば、いま示された思惟の定義が「意識」それ自体にも適用されることになるのか、という点である。感覚・想像力・知性などにかんしては、それら思惟様態が「思惟」の共通概念に包摂されるのは、自己自身の作用を表示する「意識」を、それらが共通特性として持つからだと解することができた。しかし、もし「意識」も思惟の諸様態の一つに、他の諸様態と同格に位置づけられてしまうとすれば、意識作用にも、同時に意識作用自身について表示する更なる意識が要求されてしまうことになってしまう。意識についての意識、意識についての意識についての意識、と無限に続くことになってしまう。デカルトは第六答弁で、「自分が知るということを知るための、さらには自分が知るということを自分が知るということを知るための、かくして無限にいたるところの反省された知識」(Ⅶ, 422)を退けていたはずである。

そうだとすれば、「意識」は諸様態の一つに位置づけることは勿論、数的に区別される一個の特定の思惟作用だというわけでもないことになる。意識は、思惟を

構成する内在的必須要素と解するほかないだろう。すべての思惟には「意識」が伴う。これはよい。では、思惟自身をいわば再帰的に知覚している意識とは独立に、何かについての思惟はそれ自体として存立しうるのか。志向性・脱立性を根本特性とする作用として、思惟は「意識」抜きにも自立しうる認識論的身分を権利上持つというべきなのか。要するに「志向性」と「意識」との認識論的關係をどう解するか、という問題である。たとえばライブニッツは、微小表象が統覚作用によって意識化され現に知覚されるようになる、という具合に潜在的表象と意識的知覚とを厳密に区別し、統覚作用としての意識に独立した認識論的身分を与えることで、意識されない表象を認めているように思われる（「表象 perception と統覚 aperception もしくは意識とは区別しなければならない。」 *Monadologie*, 14）。カントは「われ思う Ich denke」としての自己意識を、思惟の超越論的条件として規定し、意識を作用として実体化することを避けて、あらゆる思惟に権利上伴わなければならない形式として析出している（「われ思う」ということは、あらゆる私の表象に伴うことができるのでなければならない。」 *kritik der reinen Vernunft*, B131）。現象学では思惟の「志向性」が強調され、「意識」を「志向性」に還元しようとする傾向が強い。最近では現象学を標榜しつつも、志向性とは区別される内在性を強調することで、「意識」に固有の内在作用を認める立場もある。

デカルト自身は、思惟のハイブリッド的性格を堅持している。思惟作用そのものを表示する「意識」に対して、もとの思惟作用とは別の作用が想定されるとは考えていない。「反省された知識に常に先行するところの、あの内的な思惟 cogitatio interna」（Ⅶ, 422）ということでデカルトが考えているのは、あらゆる思惟に内在する根本特性としての「意識」のことであろう。意識の「内在性」は、もちろん直接無媒介な現前性を指すわけであるが、意識が思惟作用それ自体に内属的に備わる一契機—その意味では当の思惟から数的に区別されない—だということも表している。

#### (4) 精神は「同時に多くのことを考える」こと

精神が「同時に多くのことを考える」とすれば、以下二通りの場合が想定される。

- (i) 精神が同時に二つの思惟様態にわたって考えていること。すなわち、実体としての精神が同時に複数の思惟様態において思惟すること。たとえば何かを感じながら、何かについて理解している場合がそうである。
- (ii) 精神が唯一の思惟様態において、何かについてと同時に、考えていること自身についても、考えていること。

『ビュルマンとの対話』によれば、デカルトは上記

の二つの意味合い双方で捉えているが、意識が問題となるのは (ii) のほうである。（もっとも、(i) には (ii) が含意されているのだが。）

ところで、『省察』『序言』では、「観念」の二義性について言及されていた。観念は「一方では質料的 materialiter に知性の作用」と解される。しかし「他方では観念は表象的 objective に知性の作用によって表現されたもの」と解される（Ⅶ, 8）。「観念」が表象的に限定して解され、知性作用によって表現された表象内容（思惟内容）と同一視される場合は、「思惟の形相 forma」（Ⅶ, 160）として思惟の内容的側面を代表する。他方、質料的に限定して解される場合には、思惟の作用的側面を代表する。「観念」という用語はそれゆえ、広義に解するなら「思惟」と重なりと捉えてよいだろう。「いわば事物の像である」（Ⅶ, 37）と第三省察で規定される観念は、その意味では狭義の観念と言わなくてはならない。

したがって「観念」の二義性は、「思惟」の特性を示しているといえる。同時に二つの特性、すなわち自己自身を表示すること、自己とは異なる他なる何か（対象）を表示すること、を持っている。言うまでもなく、「観念」における作用と内容の区別は視点による区別すなわち概念的区別であって、ものそのものとしては同一である。同様のことが「思惟」における「他のものについての表示」と「自己自身についての表示」についても言える。もっとも、事がら自体の本性として、同じ一つの作用によって、他と自己とを同時に表現するということがそもそも可能なのか、という疑問は残る。しかし、そうした事態が事実として成立しているのだとすれば、われわれとしては、まずは虚心坦懐に事態そのものに目を向け、そしてそれが示唆するところを浮かび上がらせるよう努めねばならない。

### 3. M. アンリの解釈に対する批判的吟味

二十世紀の代表的な現象学者の一人であるフランスの哲学者ミシェル・アンリは、著書『精神分析の系譜』において二つの章を、デカルトのコギトについての解明に充てている。第一章「見テイルト私ニ思ワレル (videre videor)」と第二章「現象学的絶対の没落」である。そこでは徹底的に、「思惟」を「見ること」に象徴される「志向性」「脱自性」「脱-立性 ex-stasis」等において理解することが拒否されている。デカルトが『省察』の中で問題にした「思惟」は、「狭い意味での知性」などではない。デカルトは「無媒介性によって思惟を定義しようともくろんでいる」（p. 75）。「内在性」こそが「思惟」の本質である。アンリの言葉のいくつかを引用してみる。（引用訳文は山形頼洋ほかによる法政大学出版局1993年のもの。頁数も翻訳書による。ただしラテン語表記は筆者による付加。）

「最も本源的な意味において思惟とは何であるか、もはや脱-立の有限性における見ルコト videreではなく、私ニ思ワレル videor のもつ原始の思われ、根源的内在の自己触発において自身に自ら現れるような原初の現れること…」(p. 58-59)

「私ニ思ワレルと見ルコトとの決定的な対立が、そして現象性のこの根本的に様態に従って思惟を分離することが重要な意義を帯びてくる。」(p. 59)

「観念とは、かくして、思惟の自己開示、思惟それ自身の開示であって、なんら他の事物、他性、対象性の開示ではない。」(p. 76)

「諸々の思惟は、こうした観念としていっさいの表象内容を欠いており、表象の内容に依拠せずに、見ることやその脱-立(ex-stasis)に依拠せずに存在している。」(p. 78)

M. アンリなら、自己とは異なる何かを表出する脱立作用-見ることに象徴される-と、自己自身を無媒介に表出する非脱立的な内在作用が、同一の思惟作用において生じることなどありえないと主張するだろう。このことはアンリが、デカルトにおける「意識」を、感覚・想像力・知性といった諸様態とは別種の様式の思惟として、積極的に位置づけることへと帰結する。精神が「同時に」複数のことを思惟するとき、いまかりに、自分の思惟についての意識が、通常の諸様態とはまったく別種の思惟作用(思惟様態)だということになれば、意識は、脱立を本性とする思考タイプとは別の非脱立的作用として自律性を持つこととなり、「見る」こととは質的に区別される「思われる」こと、内在作用として本来的に思惟すること、として定立されても不思議ではない。アンリによれば、デカルトにおける「思惟」は、志向性とは無縁の内在的思惟としてのみ本来的に解されるべきであり、「自己自身への無媒介性という根源的主体性」(p. 59)のゆえに、すぐれて「魂」「生」という名に値するのだと言われる。

しかし、デカルトによれば、全く「同一の」精神が様態的に区別されて、感覚・想像力・知性・意志として作用するのであり、これら諸様態は唯一の主要属性である「思惟」を共有するのであった。つまり「全く同一の力」が、「想像力と共同して共通感覚に働きかけるとき」には見る、触れる等といわれ、「想像力に働きかけるとき」には想像する、想起するといわれ、「ひとりで働くとき」には理解するといわれる(『規則論』X, 415-416)。「かの同一の力」が「それらさまざまな機能にしたがって、純粹知性、想像力、記憶、感覚とよばれる」(X, 416)のである。精神自体に、魂の三部分説を想起させる部分の相違があるわけではなく、「感覚的であるところのものが、また理性的なのである」(『情念論』XI, 364)。

この原則論のどこからも、脱立作用とは無縁の非脱

立作用としての意識作用の存在を読み取ることは困難である。まして、諸様態の「共通根拠」である主要属性としての「思惟」とは別に、より本源的な「思惟」が存在せねばならない、という解釈は出てきそうにない。さらに、アルノーに対する第四答弁のなかで、すべての思惟作用は意識されてあると言われていたのだが、アンリ自身が本来的思惟作用として想定する非脱立的内在的な自己意識作用そのものは、これも意識されてあるのかどうか。意識作用の意識、またその意識、というように無限に後退することはできないとする先述の第六答弁の指摘があった。この無限後退を避けるためには、自己意識作用自体の特権性、他の思惟様態とは異なる認識論的固有性に訴えるしかないと思われるが、そうした固有性を脱立作用とは無縁の内在作用として「実体化」させることに問題はないか。そもそも「意識」は意識される当の思惟作用そのものから分離される「作用」なのか。また、思惟の自己自身の現実活動についての直接無媒介的知覚と言われる場合でも、「思惟の形相を直接的に認識することによって、私は当の思惟そのものを意識する」(VII, 160)とされているように、自己自身についての「意識」がそれだけで自立して個別に作用することは不可能とされている。「意識」は「思惟の形相」である思惟対象と無関係に存在することはできない。思惟対象は現象学的に言えば、志向の対象にほかならない。アンリの主張とは反対に、自己意識は志向的・脱立的対象と相関的なのである。

アンリの議論は、脱立作用は理性に対する方法的懐疑によって徹底的に排除・否定されているのだから、脱立作用の代表格である理性作用には何ら依拠しないデカルトのコギトは、もはや非脱立的な内在的思惟しか残されていない、という消去法によるものである。デカルトが方法的懐疑の果てに引き出した結論は、「私」が「思惟するもの」であり、「思惟」が形相的に実在することであった。たしかに、決して「理性」の正当性、特権性が結論されたわけではなかった。ここからいきおい、デカルトにおいて「思惟作用」は、理性作用とは異なる特別な存在様式を持つ何か、と言いたくなるのも分らないではない。アンリのように「内在」と「脱立(超越)」を区別するのも一つの方向性かもしれない。しかし少なくともデカルトは、そうした二元対立を打ち出していない。むしろ、「自己」と「他」、「内在」と「超越」との、西田哲学の用語を借用するなら、「絶対矛盾の自己同一」的な特性を、「思惟作用」のうちに見出していると解するべきである。

#### 4. 「思惟」をめぐる諸問題

##### (1) 「見ていると思うこと」

「この私は、感覚する私、すなわち物的なものをい

わば感覚を通して認めている私と同じ私なのである。明らかに私はいま光を見、喧騒を聞き、熱を感じているが、私は眠っているのだから、これらは虚偽である。しかし見ている、聞いている、熱くなっているとたしかに思っていること、このこと自体は虚偽ではありえない。これこそ本来、私において感覚すると呼ばれていることである。そしてこのように厳密な意味では、これは思惟することにほかならない。」(Ⅶ, 29)

「私が見るとき、あるいは(いまはそれを区別しないが)見ていると思惟しているとき、そのように思惟している私自身が何ものでもない、ということはあるかない。」(Ⅶ, 33)

同様のことは知性的理解についても当然言える。「理解していること」は「理解していると思っていること」に等しい。この「私」は「理解する私」であり、多くのことを理性のみによって、物的な像の助けなしに理解している。たとえば、いま私は三角形の内角の和が二直角であることを理解している。しかし、実は欺く神によって私は騙されているのかもしれない。私の理解は誤っているのかもしれない。とはいえ、理解していると思っていること、このこと自体は虚偽ではありえない。これこそ本来、私において何かを理解するということであり、厳密な意味では「思惟すること」に等しい。

感覚作用を理解作用へとアレンジした場合、おそらく一見不自然に映ると思われることとして、「理解する」ことは本来的に「理解すると思う」ことだと言ひ換えられている点であろう。なぜ、わざわざ「と思う」ことがさらに付加されているのか。そのことで何が違ってくるのか。そして、「理解すると思う」ことはなぜ「厳密な意味で」思惟することに等しいと言われるのか。

感覚に限らず、思惟の諸様態は全て、同一の作用によって同時に「作用自身ではない何かについて表示するとともに、自己自身の作用そのものについても表示すること」という基本構造を共有していた。つまり、思惟には「自己自身への言及・表出」が必須要素としてある。「理解すること」も思惟の様態であるからには、この自己自身への言及、すなわち自己意識が、作用そのものの内在要因として存在する。「と思う」の付加は、このことを言語的に表面化させる工夫なのである。それゆえ、「理解する」を「理解すると思う」と言ひ換えることによって、「何かについて表示すると同時にそのように表示していること自身をも表示する」という思惟の基本構造が正確に言い当てられているのだとすれば、まさにこれは「厳密な意味で」思惟することの根本特性を示しているというわけである。

感覚の場合に限らず、知性作用でも、理解された内容(思惟内容)の真偽については全くここでは問題にさ

れていない。かりにいま、私の理解は全く誤っているとしても議論の本質には関係しない。ここで問われているのは、感覚や理性といった諸様態に固有の特性—たとえば精神がそれ自体で働くか、身体との結合において働くのか—ではない。また、把握された内容の特性—明晰判明であるか、曖昧で混雑しているか—でもない。問われているのは、あくまで諸様態に共通の一般的構造なのである。すべての思惟様態には、それが思惟であるかぎり、対象の表出という志向的側面と、作用自身への自己表出という意識的側面の両方が、同時に内在しているというわけである。とくに理性作用の場合、通常は志向的側面ばかり前景に出てしまい、作用自身の表示機能としての意識的側面は背景に隠れてしまいがちである。同一の作用が同時に自(内在)と他(超越)とを表示する、という矛盾的事態のせいで気付かれないままにある事実に注意を向けさせるための工夫が、ここでは「と思う」の付加であり、方法的懐疑も実はそのための工夫だといえる。

## (2) 自己意識

デカルト的には、意識とは常に自己意識である。その意味するところは、思惟の働きそれ自身の直接的知覚が意識だということである。意識は現に作用している作用それ自体を直接無媒介に表示する。すべての思惟は、思惟の働きそのものとは区別される何らかの対象と、思惟の働き自身とを、一つの働きで同時に直接表示しているのであるから、思惟には必ず自己意識が内在するというわけである。そうだとすれば、たとえば、事故で頭を強く打った人に対して意識があるかどうかを確かめるために、その人に指を一本見せてそれが何本かを「正しく」答えるかどうかで意識の有無を確認しようとするのは、少々の外れだということになる。正しく答えるか否かは、意識の現存とは全く関係ない。というのも、意識は思惟内容(理解)に関わるのではなく、思惟作用それ自体の自覚だからである。漠然と空を見上げて空の青さや光の眩しさを感じている時、そこで意識されているのは空の青さや光の眩しさではない。何かを感じているという作用そのものの現働が意識されているのである。何度も繰り返すことになるが、デカルトにとって思惟とは、他なるものを表示することと、自己そのもの(表示作用そのもの)を表示することを、同時に一度に行う行為と解されている。それゆえ、思惟は思惟の働きのみを独占的に表示しているのだという通俗的な独我論は採用できない。デカルトにとって思惟は、「超越」と「内在」とを併せ持つ。どちらか一方に還元することはできない。

混同されがちだが、意識は思惟それ自体の直接的知覚ではあっても、思惟それ自体ではない。意識は、あくまで思惟の根本特性のひとつである。『ピュルマンとの対話』では、「意識することは思惟することであ

る」(V, 149)とされていたが、意識すなわち思惟ということではなく、意識が思惟とは数的に区別される別の作用ではないこと、思惟に内属する特性であること、を同時に示す表記と解すべきである。それゆえ、意識されない思惟は存在しないということになる。では、いわゆる無意識の存在はどうか。デカルトのテーゼに忠実にしたがえば原理的に無意識はあり得ない。精神はつねに思惟している(某宛書簡.Ⅲ, 423, ジビュエ宛書簡.Ⅲ, 478)。思惟する限り意識を伴わないものはない。よって、無意識を認めることは思惟しない精神を認めることである。「精神が思惟することを止めると言われている時には、それが思惟することなく存在すると理解するよりも、存在することを止めたと考えるほうが容易である」(Ⅲ, 478)、「われわれのうちには、われわれのうちにそれがあるのと同じその瞬間にわれわれがそれを意識することがないようないかなる思惟もありえない。」(Ⅶ, 246)

第四答弁でアルノーに対して、「精神の働き、いうなら作用こそ、われわれは現実的に意識している」(Ⅶ, 246)が、「精神の能力ないし力能」については「潜在的」にあると言えるにしても、それを現実的に意識しているわけでないとしてデカルトは答弁している(Ⅶ, 246)。この答弁は無意識を認める発言になっているのではない。そうではない。精神は、潜在的に活動を休止しており顕在化されるのを待っている可能的存在を、いわば含み持つ基体的なるものではないのだ。精神あるいは主要属性としての思惟を、すべての可能性を潜在的に内包している「普遍的なるもの」と解することはできない(アルノー宛書簡.V, 221)。精神はつねに思惟する。思惟は必ず現実態において生起し、現実意識されている。よって、潜在的に精神のうちに内在する何か無意識的なる存在をデカルトは認めない。

もちろん、生まれたばかりの嬰兒でも思惟しており、その限りでは意識している。「精神は嬰兒の身体に入りこむやすぐさま思惟しはじめ、と同時に自らの思惟を自らに意識する」(Ⅶ, 246)。嬰兒ばかりではない。胎児にあってもそうである。「人間の精神は、どこにあっても、たとえ母の胎内にあっても、つねに思惟している」(Ⅲ, 423)とデカルトは言う。

### (3) 胎児も思惟していること

アルノー宛書簡では、「われわれが思惟しているまさにその瞬間にわれわれ自身の思惟について意識しているということと、その思惟について後から思い出すということとは、別のことである」(V, 221)と言われる。われわれは普段でも、昨日の思惟について記憶していることはほとんど僅かなものである。しかし、記憶に残っていないからといって、その間、思惟が不在であったと考えるわけではない。われわれは「夜ごと

に千の思惟を持ち、覚醒中でさえも一時間に千の思惟を持つが、それらの痕跡はもはやわれわれの記憶のうち何れに残らない」(ジビュエ宛書簡.Ⅲ, 479)のである。胎児の場合も、基本的にはこれと同じであると言えないだろうか。母の胎内にいるときに知覚した思惟が、現在も痕跡として残っている、すなわち記憶されている、というわけではないので、現時点から「推測」するにしても、何らその存在を確証させる手がかりとなるものがないわけである。しかしある程度成長すれば、たとえその記憶痕跡が現に存在しなくても、自分がその当時にも思惟していたということを疑うことはあるまい。ならば、なぜ胎児の場合には、思惟していなかったと考えるのだろうか。「思惟していたことの記憶」が残っているかどうか、思惟の存在を保証するのではないとすれば、胎児の時の記憶が残っていないということだけで、胎児の思惟の不在を結論付けることはできないはずである。記憶の有無にかかわらず、過去における思惟作用の存在を経験的に肯定している、というのが通常のわれわれの判断であるとすれば、胎児の場合だけ例外的に思惟の不在が肯定されるのはなぜなのか。胎内にいて外界との接触がないからなのか。脳機能が形成されていないからか。しかし、「精神」が物体から実在的に区別される実体であるとすれば—実際デカルトはそう考えるのだが—どうか。精神の本質は思惟することである。思惟しない精神はあり得ない。精神はつねに思惟する。よって胎児も思惟するし、その限りにおいて意識している。

このような立論に対しては次のような反論が予想される。第一に、そもそも、精神は胎児の段階では発生しておらず、あるいは未発達な段階にあるので、成人と同様の機能を持つことはないのだ、という反論。第二に、思惟や意識の存在の有無は、本人のいわば「自覚」に頼るしかないとして、成人の場合には日常の他者とのコミュニケーション等を通じて、その「自覚」が間接的ではあっても検証されるが、胎児ではその兆候すら見いだせない、という反論。

第一の反論に対して。デカルトは精神の段階的発生を認めていない。「諸々の観念は年齢とともに獲得されるわけではなく、身体のかびきを脱すれば、自らにおいて見出される」(Ⅲ, 424)なのであって、子供の精神が大人の精神よりも、それ自体として「より不完全であるということは帰結しない」(Ⅲ, 423)と言われる。また第四答弁では、思惟する力が胎児や幼児ではいわば眠っており、狂人においては消失しているという反論に対して、精神は消失したり眠ったりするのではなく、身体的器官のかびきによって「障害を受けている」と解すべきだとデカルトは言う。精神がそれ自体として作用する「自由度」が、通常の場合に比べて少ないだけであって、精神自体の作用がなくなるわけではない。本性的に変成したわけでもない。精神の本

性が思惟することであって、精神は延長することを本性とする物体（身体）から実在的に区別されることを認めるなら、思惟する力が身体器官から産出されることはあり得ないのである。デカルトによれば、受精した瞬間からわれわれは「喜び」「愛」「憎しみ」「悲しみ」の四つの情念を抱いているという（シャニュ宛書簡.IV, 604-605）。もっとも、胎内において、それらはきわめて混雑した感覚でしかなかったわけであるが。さらにいえば、精神は胎内で周囲の物質によって生成されるのではない。ある意味、「精神」は「生命」という概念によって理解可能なものかもしれない。受精した瞬間から身体的な死に至るまで、自らをいわば運んでいく身体の物質の状態は絶えず変化していくが、「生命」そのものは終生、持続していく。身体の生成を産出・維持していく「力」としての「生命」は、身体を構成する諸物体によって産出され、その結果として存在するのではない。身体が「生きた」物体なのは、物体を生かし続ける「生命」によると考えるなら、「生命」を身体組織・器官と同一視することはできないのではないだろうか。いずれにしても、「精神」は「生命」のように、受精した瞬間から作用するとデカルトは考えている。たしかに、自由度が少ない、身体との結合の度合いが強い、という点で「未発達」といえるにしても、しかし、思惟の基本特性である「自身の活動とは異なる他なるものと、自身の活動そのものとを、同一なる作用で同時に表示する」という性質自体は、精神が存在し始めるのと同時にその後終生変化しない。胎児レベルの思惟ですら、「若干の知性作用」（Ⅶ, 78）と自己意識とを前提とするのである。

第六答弁第九項では感覚が「身体器官固有の運動としての感覚」「身体器官との合一から反響してくる諸知覚—たとえば痛みを感じる—としての感覚」「外的物体についての判断—幼児期の先入見を含む—としての感覚」の三段階に分類されていた（Ⅶ, 436-437）。いま、そのうちの第二段階と第三段階とを、胎児の思惟と幼児の思惟との対比として考えてみるとどうだろうか。両段階とも、第一段階である身体器官の運動そのものとは区別される、「思惟作用」に属している。その限りでは、思惟の根本特性の共有という視点から、両者は同格である。相違は、第三段階は外的物体（外界）についての表示が含まれるのに対して、第二段階は専ら身体内部についての表示に限定されているという点である。志向される対象の表示内容という面で、その明証性に差があるにしても、両者とも自らとは他なる何かを表示することによって自らの作用そのものを表示する、という点では同格なのである。

第二の反論に対して。第二の反論には、その前提として、思惟の存在は言語（コミュニケーション）の存在によって検証されるということがある。極論すれば、思惟は言語行為を不可欠な要素とする、ということに

なるだろう。たしかにデカルトは、人間言語の持つ高次機能を肯定してはいる。しかし、言語活動は必然的に思惟活動ではあっても、思惟活動は必然的に言語活動である、とまではデカルトも言い切ることはないだろう。「言語」それ自体が「思惟」なのではない。この点では、言語は思惟を表現する道具だ、という通俗的言語理解にデカルトは与している。もっとも、思惟は表示作用なのであるから、その意味で記号性を有するとしてよい。しかし記号体系と記号運用能力とは区別されるべきだろう。デカルトの思惟はもちろん「現実的能力」に関わる。ともあれ、言語活動が人間において成立するためには、精神の活動が前提とされねばならない。あくまで、「思惟の力」が理性的行為としての言語活動の原因である。言い換えるなら、思惟の力が存在するからこそ、理性的行為が生成するのである。胎児や幼児が言語を使用しないことは、いわゆる理性作用の欠如を示してはいても、思惟作用の存在そのものまでも否定する根拠とはならない。

#### (4) 精神は物体よりもよりよく知られること

いかなる意味で「よりよく」知られるのか。

「蜜蠟あるいは他の何らかの物体の認識に役立つことができるどんな理由も、同時に私の精神の本性をよりよくせずにはおかない」（Ⅶ, 33）。われわれが物体について認識する際には、認識対象である物体についての直接的認識だけではなく、必ず、認識していることそれ自体についての直知を通じて、思惟の力や精神そのものが知られるのであった。引用文中の「同時に」という表現は、まさに思惟の根本特性である「超越」と「内在」の「同時」表示という事態を示唆している。さらに、デカルトはすぐあとで「精神の概念をより判明にすることのできるものは、精神そのものにおいて他にも多くあるので、物体から精神に及ぶものは、ほとんど数えるに値しないと思われる」（同）と続けている。ここで言われる「物体から精神に及ぶ」とは、『哲学原理』第一部11節の表現によれば、「何か〔精神とは〕他のものを認識するなら、同時にまたいっそう確実に、われわれは自分の精神の認識へと必ず導かれる」（Ⅷ-18）ということである。ところで、われわれの認識対象は物的事物だけではなく、もちろん精神的事も対象となる。われわれは目にするところのできる物体のことだけを考えるのではない。むしろ、いまここには存在しない、過去や未来のことについて、後悔したり懐かしんだり期待したり不安を感じたりする。そうした場合でも、そのように考えていることの「思惟の働きそのもの」を同時に直知している。物体については、対象的にしか知られない。しかし精神については、精神的事を主題化してそれについて対象的に知ることができるのみならず、精神そのものの働きを意識するという形で、その形相的実在についてもじかに



触れている。つまり、精神はいわば二重の仕方では知られるのである。しかも、形相的実在性のレベルにまで達することが可能だという点で、物体についての対象知とは区別され、その特権性が強調されるのである。

##### (5) 動物は思惟しないこと

動物機械論・人間身体機械論などのレットルとともに、デカルトの公式テーゼの一つとして、「動物は思惟しない」を挙げることができるだろう。もっとも、動物は思惟しないことをデカルト自身が最終的に断定的に宣言しているわけではない。それでも、いくらかの譲歩と躊躇を示しながらも、「動物は思惟しない」ことを積極的に肯定したい、という思いは伝わってくる。ガッサンディへの答弁の中では、「自己自身のうちにおいて省察する精神は、自らが思惟するものを経験することができる。しかし、動物もまた思惟するのかわからないのかについては、[精神は] 経験することができない」(Ⅶ, 358)と言われている。そして人間精神にとっては、「動物の作用からア・ポステリオリに探査する」(同)ことによってしか、動物が思惟するかどうかを確認するすべはない、とデカルトは言う。ここではデカルト自身、動物が思惟するかどうかの結論を出してはいない。動物にも可能性はある、との含みは持たせている記述にはなっている。むしろこの引用から汲み取るべき点があるとすれば、人間の場合であれ動物の場合であれ、思惟の存在は「自らが思惟することの経験」においてのみ示されること、すなわち自己意識の有無が思惟の存在を確証するということ、である。

いま挙げたガッサンディへの答弁より、もう少し踏み込んだ叙述としては、ヘンリー・モア宛の書簡がある(V, 278)。それによると、動物は音声や身体的運動によって「自然的衝動 *impetus naturales*」を表示するとしても、単なる自然的衝動ではなく「思惟」を、何らかの「記号」や「真なる言語」によって、表示するまでには至っていないとされる。したがって、動物は思惟を欠いていると結論付けられている。ここで言われる「思惟」は、もちろん、われわれの解釈でいうところの「(自らの作用以外の) 他なるものと、自らの作用それ自身とを、一度に同時に表示すること」でなければならない。そうだとすれば以下のように解釈することができる。動物の示す行動は、たとえそれが何かについて表示しているにしても、その表示には、同時に「自分自身の作用そのものを表示すること」が欠けている、と。つまり動物の表示作用には、思惟に不可欠な自己意識の側面が欠けているというわけである。そのような作用は「自然的衝動」ではあっても「思惟」ではない。この区別は人間についても適用できる。人間においても、身体レベルの「自然的衝動」と思惟作用である「感覚」「情念」とが区別されねばならない、と。

思惟を単なる脱立作用のみによって定義するならば、動物も「思惟する」といわれる十分な資格を持っている。だとすれば、デカルトがあればほどまでに、動物に「思惟」の存在を認めなかった理由が見えてくる。それはデカルトが、単なる脱自・脱立作用としてではなく、脱自(超越)と自己言及(内在)の両側面を同時に一手に併せ持つ表示作用として、「思惟」を捉えていたからである。動物の行動は、デカルト的「思惟」の資格を満たしていないのであった。

## 5. おわりに

同時に自己と他を同一の作用において表示する、という「思惟」作用特有の表示方法の在り方について、われわれは結局のところ説明(ロゴス)を与えることはできたのであろうか。

再確認しておく、自己は直接無媒介的に、他は間接的に知覚されるわけではない。両者とも、あくまで「直接的に」知覚されるのである。上述のように思惟の形相は「直接的に」知覚される。精神によって直接的に知覚されることが「観念」の本性であることを前提とするなら、他について思惟するということは、他についての「観念」を持つということであり、それは他について「直接的に」知覚していることをいうのである。「観念」を持つこと自体に「間接性」「媒介性」という含意があるわけではない。むしろデカルトに即していえば、「観念」は精神による直接的把握そのものでしかない。物体は「観念を介して間接的に」知られるが、精神は「観念を介さず直接的に」知られるというような対立図式も、「観念」を「表象(内容)」や「概念」に矮小化して解してしまうという誤解を招きかねない。自己意識の直接性についても再確認しておく。思惟作用そのものに関わる自己意識は「思惟の形相を直接的に認識することによって」知覚されるのだから、思惟の形相の認識を「介する」間接的な知覚ではないのか。自己自身についてのいわゆる反省的知識ならばそうであろう。しかしま問われているのは、「思惟の形相」と「思惟の質料」が、同一の思惟において同時に知覚されるという事態である。そこには認識におけるタイムラグも、存在における数的区別もない。何かについて思惟している時には、思惟されている何かについてだけでなく、思惟作用そのものについても自己意識として「直接的に」知覚されているわけだ。

相矛盾する両立不可能に思われる事態の現出こそが「精神」の働きなのかもしれない。精神は、そのような精神自身の働きを理解しているのではなく、いわば「感じている」。「意識」とは、そうした「感じ」の現出なのだろう。理解可能な仕方でも客観的に説明しようとすればするほど、ますます当の本質から逃れ去ってしまうもの、「精神」「生命」「力」といった語によって象



徴されるもの。ところで、相矛盾する事態の同時存立—まさに「生」と「死」の同時存立性および不可分離性—は、延長を本質とする物体において見出すことはできない。というより、「延長するもの」における定量的性格・計測可能性・予測可能性などは、まさにそのような矛盾の現象を排除するところに成り立つのであった。

ある意味「驚き」なのは、そのような「理解を超えている」矛盾した事態の存立について、われわれはそれに気づくことができるという事実であろう。「人間精神」の卓越性は、あらゆる事象の生起にロゴスを与えてそれを「理解する」ことができる点にあるのではなく、われわれの理解を超えているものに触れていること、理解可能なものと理解を超えたものの限界に触れていること、にある。そして、そうしたことに触れる機会を、「思惟」そのものの自己意識が与えてくれるのだろう。自己と他との同時現出としてしか「思惟」そのものが捉えられないこと、そうした絶対矛盾を内在した形でなぜかわれわれに与えられること、こうしたことの自覚が形而上学の出発点である。

したがって、デカルトの問題とする「思惟」は、むしろ「科学的」に分析されなければならないという主張は愚の骨頂というべきかもしれない。科学的分析とは「目に見える形で」実証的に説明することである。しかしそうすることで、「思惟」の持つ特異な存在様式が、全く別なる存在様式へと歪曲されてしまう。平板化されてしまう。思惟の持つ「内在」と「超越（外在）」の相互緊張が、延長の外在性へと強引に一元化されてしまう。科学者はそれで「分った」つもりなのかもしれない。物理学や生物学の研究対象である「力」や「生命」にかんしても、その実在を「アトム（究極的物質）」によって説明しようとする態度を堅持しているが、その基本理念はギリシアの原子論者と何ら変わるものではない。しかし、もし「力」や「生命」も、これまで問題にしてきた「思惟」と存在論的身分において同種なるものだとすればどうなるのか。「分ける」ことのできない何かだとすればどうなるのか。「内在」即「超越」なる特異な存在性格を持つものに対して「精神」という名前を与えるなら、「力」「生命」「自然」などは、すぐれて「精神」なるものではないだろうか。デカルトが、物体とは実在的に区別される「精神」の実在を肯定したのも、こうして考えてみると、近代をはるかに超えていたというべきかもしれない。近代の超克ということで、デカルト的二元論の乗り越えが標榜されているが、いまだにデカルト的二元論のレベルにまでわれわれの理解が追い付いていないというのが実情なのかもしれない。いまだにデカルト形而上学はその真意が誤解され続けているのではないだろうか。

### (注記)

デカルトからの引用は慣例により、アダン・タヌリ版全集(*Euvres de Descartes, publiées par Ch.Adam et P.Tannery. Vrin. 1996*)の巻数(ローマ数字)と頁数(アラビア数字)で示してある。たとえばⅦ, 33とあれば7巻の33頁からの引用を示す。またⅧ-1, 8とあれば8巻の第1部8頁からの引用を示す。訳文については『省察』(本文と第二答弁「諸根拠」と『哲学原理』)に関して「ちくま学芸文庫」版を、それ以外については白水社版デカルト全集を参考にした。

本論文作成には全く反映されずしたがって紹介する機会もなかったが、目を通した欧文参考文献について記載しておく。

Robrt McRae: "Descartes' Definition of Thought" in *Cartesian Studies*, ed. by R.J. Butler, Blackwell, 1972.

Gordon Baker and Katherine J. Morris: *Descartes' Dualism*, Routledge, 1996.

Lilli Alanen: *Descartes's Concept of Mind*, Harvard U.P., 2003.

Desmond M. Clarke: *Descartes's Theory of Mind*, Oxford U.P., 2003.

Marleen Rozemond: "The Nature of the Mind" in *The Blackwell Guide to Descartes' Meditations*, ed. by S. Gaukroger, Blackwell, 2006.

Janet Broughton: "Self-Knowledge" in *A Companion to Descartes*, ed. by J. Broughton and J. Carriero, Blackwell, 2008.

(2012年9月18日受理)